

幸せ

私は今、世間から見たら「かわいそう」と思われてしまう家庭かもしれない。でもそんなのはただの勝手な想像。「一人親はかわいそう」「親は二人いたほうが絶対幸せ」そんな勝手な想像で誰かが傷つく前に、傷ついてしまった人がいたとしたら、その人の傷が少しでも癒えるように、私の気持ちを伝えます。

私は今、母と姉と祖父母と暮らしている。「私は幸せだ」と胸を張って言える。それに気がついたのは父親と別居を始めてからだ。

父親と別居を始めたのは、私が小学二年生の頃だった。それから小学三年生までは車で三〇分かけて通学していた。その後、姉の卒業と同時に小学四年生で転校し、両親の離婚が成立した。

この春二年生になって、国語の授業で学んだ『虹の足』という詩の中にあつた「他人には見えて自分には見えない幸福の中で格別驚きもせず幸福に生きていることが一。」という言葉と、作者の吉野弘さんがこの詩をつくった理由を聞いた。自分に両親がいたときと一人親のときの二つの状況を考えることで、自分を客観的に見ることができ、今の気持ちを整理することもできた。自分に両親がいた時の一人親のイメージと、自分が一人親になったときとでは全然違った。世間に出回っているイメージはあくまで外側だけで、内側のことはあまり知られていないのだとも思った。詩の中のほんの一部分の短い言葉だったけれど、今までモヤモヤしていた心が“すっ”と、晴れたような気がした。幸福はとても身近にあるのだ。小さな幸福はあまり感じられないだけで、自分のまわりにはたくさんあり、大きな幸福だけが感じられるのではないかと思う。

私は両親が離婚し、一人親に対するイメージが、一人親はかわいそうから、一人親でも祖父母や母、姉と会話ができて、一緒に暮らしているだけで幸せなことというイメージが変わった。両親がいれば、一人親より幸せかもしれない。しかし、一人親だからこそ感じられる幸福があり、小さな幸福に気付きやすくなるのかもしれない。

両親がいれば必ず幸せ、一人親は外側からだけ知るのではなく、内側からも知り、もっと一人親についての世間の考えが変わるといいと思う。

私は今まで、母にあまり迷惑がかからないよう、自分にできることは最大限してきたつもりだ。さらにこれからは、母に今までできてもらったことの恩返しができるようにしたいとも思っている。

母の気持ちは私にはわからないけれど、母はきっと「申し訳ない」という気持

ちがあるのではないかと思う。私はそんな母の気持ちが、少しでも軽くなったらいいなと思っている。離婚してから、仕事の量を増やして頑張ってくれている。私もいつまでも、母に甘えてはられないと思っている。そんな母を見習って、母への恩返しのひとつひとつと自分のためにもなるよう、これからも勉強などを頑張りたい。

私は両親がいる人の気持ちも、一人親の人の気持ちも少しはわかると思っているから、こんなことを言っているけれど、すべての人が「自分は幸せ」と感じているとは限らない。私が一番伝えたいことは「どこかに小さな幸福があって、それを少しずつ集めて行けばどんな人でも幸せになれる」ということだ。だから最後に、自分にもみんなにも聞きたい。「あなたは今幸福ですか。」「あなたの小さな幸福に気付いていますか。」と。